

## ヨーロッパ博物館視察記 V

## Survey Reports of the Museums in Europe V

間 多 善 行  
Yoshiyuki MADA

## マドリード

8月9日13時50分ローマ発、16時5分マドリード着の予定が、最初の出発から遅延を始め、どういう間違いなのか予約便に席がとれないとのことで、ローマ空港を離陸したのはなんと20時20分であった。フライト時間は僅か2時間15分なのが、ホテルを出たのが14時頃で、マドリードへ着陸したのが22時35分であったから、かれこれ8時間35分かかったことになる。日本の交通機関の規則的なことが、こと毎に外国旅行者から聴かされて、今迄は他人事に聴き流していたが、自分で体験して始めて、それがいかに有難いことかがわかった。ラテン系の国では遅延は日常のことらしい。それに日本の飛行場であれば、余程のローカル線でない限り、食堂・スナック・喫茶その他のサービス施設が調っていて、時間をつぶすのに苦勞しないが、外国の空港は幹線でも大した施設はない。そこで時間をつぶすのが大変な苦勞である。大体私は電車や汽車の中で席さえあれば、本を何時間でも読んでいられるから不自由はしない。しかし、飛行機の待合室はお手挙げである。第一、あの喧騒が気持をいら立てて読書の雰囲気はどうしても作れない。第二に、飛行機の場合はアナウンスを聴き落したら、置いてきぼりや食うから、アナウンスのあるたびに注意を集中して聴かなければならない、とても読書のできる場所ではない。そんな苦勞を長時間重ねて、ホテルに着いたのが24時近い時間であった。そこで待っていたのが、これまた日本と勝手の違う従業員の就業慣習の問題である。私の場合35人のツアーを組んでいたのであるが、日本であれば団体客が時間に遅れて到着することがあっても、少々嫌な顔はするかもしれないが、それでも超過勤務時間を延してでも、とにかくお客が各自の室へ落付くまでは、手伝って行くのが普通である。ところが外国の場合、とくにヨーロッパでは約束の時間が過ぎると仕事が途中でであろうと放りだしてさっさと帰るのが当然だそうである。この日も深夜近くにチェックインするのだから、サービス要員は当直だけしかいない。室が決らないのか、長い間荷物を持ったまま待たされるから、中にはロビーの床で荷

物にもたれて寝込む人もいた始末で、1時間近くたってからやっと室へ案内されることになった。室は戦前からの建物らしいが、立派なものでその上手入れが行届いていた。今までに泊ったホテルの中でフランクフルトとここが戦前からの建物で、他は戦後と見られるが、戦後にできたものは概して軽い感じである。例えばドアがプラスチックであったり、テーブルやインテリアがプラスチックであったりする。そこへ行くと戦前のものは本格的な材料を使っている。その同じ戦前の建物ではあるが、フランクフルトでは中央駅の横丁にあり、今から考えると駅前旅館であったに違いない。そこへ行くと、このマドリードのカステラーナ・ホテルは市の中央部、カステラーナ大通りにあり、堂々たる一流ホテルである。

ホテルの棚下しに少し時間をとったが、ここでは目指す美術館はプラド1館なので、街も少しはゆっくり観ることにして、とにかく深夜の第一夜を寝に就いた。

疲れていたせいで、ぐっすり眠れたのであろう。眼がさめたときは朝日が窓から差し込んでさわやかな朝であった。窓際へ寄って外を眺めると、緑の色が驚く程鮮やかである。今度の旅行で日本を離れて以来、始めて見る鮮烈な色である。ゲータはイタリー旅行でアルプスを超えて、初めて見る南国の光りに感激しているが、私はジュネーブからアルプスを越えてローマに入ったときは、光は余り変わったとは思わなかった。それが、ここマドリードへ来て始めて南国の夏らしい光を感じたのである。しかし南国といっても、マドリードで北緯41度である。緯度の数字を挙げてピンと来ないから地図で比べて見ると、マドリードで岩手県盛岡のちょっと北にある一戸に当る。ローマで函館、ゲータの生まれたフランクフルトに至っては50度であるからサハリンの中央を横切っていて、旧日ソ境界線の上にあるわけである。いかにヨーロッパが北に位置するか、そして大西洋の海洋性気候の恩恵を受けているかがわかるというものである。これなんかも現地を踏んで始めて実感が湧く博物館的認識の最たるものである。さて、そのさわやかな気持で午前中は、

明日のリスボン行の打合せや何かで時間をつぶした。というのはこのリスボン行きはツアーのスケジュールを離れて、私と同行の友人と二人だけのプライベートなものだからである。その手続きのため2、3の事務所を移動中に市街の風物を観察したが、街並の綺麗なことは私が今度の旅行中に訪れたどの市よりも上であった。その特長は建物が汚れていない上に空気が澄んでいて、太陽光線が輝きを持っていることにある。建物が汚れてないということは空気が澄んでいることに原因するのだろう。後に見たロンドン、パリも合せて私が見たヨーロッパの主要都市は9つであるが、そのどれよりも空気が爽やかで、色彩が鮮やかなのがこのマドリッドであった。一度の経験で断定することはできないので、これについてご存じの方はご教示願いたい。

その爽やかな街の中で、ひととき印象に残っているのがコロブスの銅像である。高さ20メートルはあろうと思われる台柱の上に右手で何かを捧げるように持って、立っている。それが何であるか、高過ぎて判らない。これはカステラーナ大通りにある小公園に堂々と世界を見下すように立っている。何といっても彼は世界史の時代を画する人物である。この、日本でいえば皇居前広場のような場所に立つに匹敵する人物であろう。ところで、彼はスペイン人ではなくてイタリーのジェノアの人である。アメリカ発見(当時はインドの近くだと思われていた)がスペインのイサベラ女王をスポンサーとして行われたとはいえ、彼が主体で行われた冒険であるから、彼が稱えられるのは当然であるが、これがもし日本だったら、どうであろう。日本に莫大な富を齎らした偉人であったとしても、それが外国人だったら、あのように日本でいえば日比谷公園の大通りに面して高層ビルに互しても見劣りしないような銅像が建てられるだろうか。外国で飛行機が落ちて、ニュースの最優先の関心事が日本人が乗っていたかどうかにあるようなエキセントリックな国際感覚を持った人が多いらしい日本では、ちょっと無理なような気もする。

印象に残ったものがもう1つある。それは昼食に食べたスペイン料理である。元来私は食べ物には特別な興味はないので、今度の旅行でも事、食物に関しては殆んど関心がなかったのであるが、日航の支店でリスボン行きの打合せを終って、何気なく「何処か昼飯を食べるところは、この近くにありませんか」と聞いたところ、ちょっと行った横町に日本人に評判のいい手頃なレストランがあるとのおこで、教えられたとおりに、そのバラッカという店へ行った。メインの部屋とそれに続いたサブの部

屋とで3、40人位の席のある中位の店で、驚いたことに出されたメニューを見ると日本語の説明書きが付いている。なる程日本人が沢山来るのだなと思知らされた。そのなかの私に向きそうなものを注文したら、それがピタリと当て、全く申し分のない昼食になった。それは日本でいうシーフードの炊きこみ御飯の類いで、魚貝類を味付けて米飯に煮込んであるのだが、その味付けといい、香料としてサフランを入れてあって御飯が真っ黄色に染まっている、その関係か魚貝の生臭い匂いがちっともしない、私の好みに全く当てはまったものであった。余り美味しかったので、ウェーターに「ヴェリー・デリシヤス」と賞めて、何という名だ、と聞いたら「パエリヨ」ということであった。日本へ帰ってから、人に話したら「あゝ、あれですか、日本でもやってるところがありますよ」と、あまり無造作にいうものだから少しいこちになって、どこでやってるか確かめずに別れたが、その後日本ではあり付けないでいる。このグルメ流行の時代に評判にならないところを見ると私の口が余程変骨にできているのかもしれない。

くだらないことに紙面を裂くなどお叱りを受けそうなので、そうそうにタクシーでプラド美術館に乗り付ける。

## 9. プラド美術館

スペイン王室の美術品、と言っても絵画が殆んどであるが、絵画だけに関していえばルーブル、エルミタージュと肩を並べる程のヴォリュームを感じさせる、堂々たるコレクションである。その点、コレクションの性質からいえば、フィレンツェのウフィツィ美術館に近い。何故かというウフィツィのコレクションは、メディチ家がパトロンとして育てたような画家を中心として、当時のフィレンツェ、ヴェネチア、ローマ等で活躍した著名な画家の作品を網羅しているのに対し、プラドはギリシャ出身でスペインを舞台として活躍したエル・グレコ、グレコより半世紀遅れて生れ、スペインの宮廷画家として活躍したベラスケスの作品を始め、それより1世紀程後に出たゴヤ等スペインを代表する大画家の作品を中心に、当時の各国の代表的画家の作品が網羅されている。いわば、ウフィツィ美術館はルネサンス絵画を代表するのに対し、プラド美術館はバロック、ロココ絵画の代表作が集まっているといっているのであろうと思う。しかし、それも厳密にいうと欠点だらけになるので、大体の傾向を知ることができるとい程度であらう。それにしても、近頃のように博物館ブームになってくると、博物館学の1分科として博物館分類学が是非必要である。そして分類の大

グループ毎に分科学会を作って研究するようにしなければ、今のように全部門を包括した広範な組織では共通の話題がますます少なくなって行くと思う。この問題は将来深刻になってくると思うので、この視察記が終わったら、考えを纏めてみようと思う。何しろ日本だけでも、博物館新設の勢いは衰えていない、現在では博物館と数えるもの4000を越すに至っている。この日本のブームに加えてアジアN I E Sが追っかけてくることは必至である。その節日本の博物館学会がリードできないようでは、日本の文化も鼎の軽重を問われることになりそうな気がする。さし当り、ソウルのオリンピックが終わったら韓国で博物館ブームが起るのではなからうか。

さて、それはまた別の機会に研究するとして、プラド美術館に戻ろう。建物はルネサンス式で、大きさはウフィツィ美術館より大きく、ウィーンのアート史博物館と同じくらいはあろう。展示資料もウィーンに劣らない。内容はウィーンよりは特徴的で、外の美術館では見られないグレコやゴッダの大作が揃っている。殊にグレコの宗教画の大作は今でも儼に浮かんで来る程印象的であった。評価はやはり星4つである。

これでマドリードを終わって、リスボンへ移ることにしよう。

#### リスボン

ポルトガルは15世紀末から16世紀にかけての大航海時代に、スペインはコロンブスの新大陸発見以来、アメリカ方面に進出したのに対し、ポルトガルはアフリカ西海岸を南下していた。そして1497年ヴァスコ・ダ・ガマが喜望峯を廻ってインド航路を開くに及んで、東洋に向けて主力を注ぐことになる。この大航海の尖兵として、その頃カトリック教会は新天地に布教の新領域を求めて、宣教師を乗り込ませていた。そこで、ローマの教皇庁が布教地争いを起しては困るので、西経50度を境として、それより西はスペイン、それより東はポルトガルの布教地と決めた。これが、布教だけに限らず、商業から植民地政策の勢力範囲まで決定することになった。その面白い証拠が今も南米に残っている。ちょっと世界地図をご覧になれば、ブラジルの東部、南米の肩に当る辺りを西経50度の線が南北に走っていることがおわかりになるであろう。大体南北アメリカはスペインの布教圏であったから、メキシコ以南のいわゆるラテン・アメリカはスペイン語が公用語になっているのに、このブラジルの50度線で区切られた三角地帯だけは今でもポルトガル語が通用していて、言語学では孤島になっているのである。

もう、この頃には地球が丸いことが実証されて、相当精密な地図ができていたのであろう。何しろヴァスコ・ダ・ガマが喜望峯を廻ってから40数年後の1543年には、もうポルトガル人が種ヶ島に来ているのである。そして、その6年後の1549年には宣教師フランシスコ・ザビエルが鹿児島に上陸している。驚くべきスピードである。

つまり、16世紀に日本が西欧に窓を開くようになったきっかけはポルトガル人がつくったのである。そのことをポルトガル人はよく知っていて、日本人には親しみを持っているようである。そのポルトガル人の国の主都リスボンに8月11日12時5分に着陸。空港には同行の友人が、人を介して案内を頼んでくれている現地在住7年になるとい日本人が迎えに来てくれていた。とりあえずホテルへ落ち付いて、昼食をしようということで、ホテルへ向う。ホテルはシュラトンである。アメリカ資本のチェーンであるから新築であるが、ここの建物は大理石を豊富に使って、今度の旅行中私の泊ったホテルの中では一番豪華であった。なにしろ浴室と洗面所などは、床から浴槽・洗面台・洗面器等総大理石張りである。附近に大理石の産地があるのであろう。さて昼食後、その案内者の車で目指すグルベンキアン美術館に出かけた。

#### 10. グルベンキアン美術館

この美術館は、私の行った当時から数年前に建てられた私設の博物館で、まだガイドブックには載ってなかった。昭和54年刊行の講談社『世界の博物館事典』にも載ってない。けれども決して貧弱な博物館ではない。その規模を想像して頂くために評点を先に付けると星4つの裾にあるというところで、上野の国立博物館に近い感じである。展示物も東博に似た内容で美術全般に及んでいて、違うところは東博のように考古資料がないことである。まあ東博の表慶館を省いた程度と考えたらいい。どうして私がそんなところを知っていたのかというと、最初に書いたように、同行の友人というのが新聞社の事業部の人で、このグルベンキアンの有名な大航海時代以後の豊富な服飾コレクションを日本で展覧し、その見返りとして私の勤めていたところのコレクションと交換展示をしようという企画があって、その下見の意味があったからである。

それで、この美術館の成り立ちから大略説明すると、まずグルベンキアンという聞き慣れない名であるが、これは人の名前前で、南米ベネズエラあたりの石油財閥のボスで、第二次大戦中リスボンを足場に、交戦国に石油を売り込んで巨利を博したらしい。その期間中にリスボンが気に入って、戦後ポルトガルに帰化永住し

た、という変わった経歴の持主である。しかも、相続者がいない独身で、グルベンキアン財団をつくって文化事業に専念していたが、死に際して残余の財産を全部ポルトガル国家に寄付した。美術館はその財団の事業の一環として経営されているものである。展示品にはどのようなものがあるかという点、絵画では大作は少ないけれどもルネサンス期以後のものは、近現代に至るまで大体揃っているし、工芸品は多種類に及ぶ。陶磁器、武器・武具、ガラス細工等相当な物が揃っているし、目玉の服飾品・タピストリ・カーペット等に至っては群を抜いている。異色の美術館として注目されていると思われる。

建物は近代式のコンクリート建築で、私はどうも日本の建築家が設計したように思われてならない。その点を聞き洩らしたのは残念だが、梁や桁の水平線が強調されている点、日本建築の感じが濃厚に出ている。私は建築については全く素人だから、これ以上の分析は控えておくことにする。さて、これでグルベンキアンについて、一通りの説明を終ったので、一応ホテルに引上げることにする。

さて、これでリスボンへ来た目的は達したわけで、明日は午前中市内観光をして、午後の飛行機でマドリードへ帰り、ツアーのグループに合流することになる。

翌朝、市営の観光バスで市内を一巡したが、マドリードに比べて規模は数等小さく、マドリードのような清潔感もなく、何となく裏ぶれた港町の哀愁が漂っているようであった。後で調べてみたらマドリードは人口300万に対し、リスボンは90万であった。ヨーロッパ観光の表街道から外れているのも無理ないと思われる。海上貿易華やかだった頃は繁栄しただろうが、航空交通の時代になって益々苦しくなった雰囲気を感じられる。そんな中で、ここだけはキラキラと光り輝いているのがジェロニモス修道院のあるインペリオ広場一帯である。リスボンはテージョ川の河口港で、そのテージョ川はイベリア半島の中央を東部の高原地帯からマドリードを通過して一直線に大西洋に注いでいる。大河の多い大陸では余り名も知られていないが、長さ625キロで、わが日本一の信濃川が369キロであることから考えると相当な川であることがわかる。そのテージョ川河口の右岸に開けた港町がリスボンで、大航海時代には東洋から香料を満載して帰る貿易船が後を断たず、ヨーロッパの香料を一手に引受けて繁栄を極めた中心がこのインペリオ広場である。奥手には、ヴァスコ・ダ・ガマの東洋航路開拓を記念して建てたジェロニモス修道院が華麗に横たわり、河岸に

は海賊の襲来に備えたベレンの要塞が控えて、この一帯だけは往時の希望に満ちた新世界開拓の雰囲気は今も残光を放っているようである。その一隅に国立馬車博物館というのがあって観光コースに組み込まれている。

#### 11. 国立馬車博物館

建物は1階建てで余り目立たない。中へ入って見ると、ますます冴えない。というのは展示品が馬車であるから、1台や2台ならともかく、何10台もの馬車を1つ1つ飾り台を造るのは大変だからであろう、モルタル塗りの床の上にずらっと4列に並べてある。照明が不十分だから、何のことはない地下駐車場に入った感じである。1台1台見れば金ピカで、それぞれに工夫を凝らした装飾が施してあるのだが、こう、十把一からげに並べてあると1つ1つ丁寧に見て行く気がしない。国立ともあれば展示にもう一工夫して欲しいものである。それはともかく、この博物館はもと王立乗馬学校であったのを、アメリカ女王が1905年に博物館として一般公開したもので、ヨーロッパ各国王室の馬車が集められており、マリア・アントワネットの乗用車もある。この種の博物館としては世界一だとガイドが胸を張っていた。私の評価は星3つである。

これでイベリア半島を終って、明日はロンドンに向う予定である。ロンドンでは4日間の滞在予定をフルに使って、できるだけ博物館を観察する心算である。